



日中両言語における擬音語の意味と意味拡張 — フレーム意味論の観点からのアプローチ

游, 韋倫

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2014-09-25

(Date of Publication)

2015-09-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6208号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006208>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

博士論文

日中両言語における擬音語の意味と意味拡張 —フレーム意味論の観点からのアプローチ—

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

和文要旨

日中両言語における擬音語の意味と意味拡張
—フレーム意味論の観点からのアプローチ—

本論は、フレーム意味論という認知意味論的観点から日本語と中国語における擬音語の意味を比較分析するものである。擬音語の意味的特定性、意味拡張、現実音との結びつきを包括的に考察した結果から、日本語の擬音語の意味的特定性は中国語のそれより高いことと、擬音語は意味的特定性が高い場合、意味拡張を起こしやすく、現実音との結びつきが弱いということを主張する。

第2章 研究背景

擬音語は豊富な意味情報を持つ語彙群である。それにも関わらず、意味論の観点から本格的に扱った研究が多いとは言えない。状況的な言葉と呼ばれる擬音語は近年、単なる現実音を模倣する言葉ではなく、特定の状況で起こった現実音を描写する語であるというように、定義が見直されるようになっている。この点を踏まえると、オノマトペの意味論研究における更なる展開が期待される。本論では、擬音語が描写する状況に関する情報に着目することで、日中両言語における擬音語の意味的性質の差異を明らかにする。

第3章 本論の枠組み：フレーム意味論

そのために、本論ではフレーム意味論を理論的枠組みとして採用して考察を行う。フレーム意味論は認知意味論において重要な理論の1つであり、語の意味を理解するには、それに結びつく背景的な知識体系(百科事典的知識の総体)を理解することが必要であるという考え方をとる立場である。この理論は、豊富な意味情報を持つ擬音語の意味研究に相応しいと考えられる。

氏名： 游 韋倫

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名 (主) 松本 曜 教授
(副) 田中 真一 准教授
(副) 實平 雅夫 教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

第4章 擬音語の意味

擬音語が表す音や声の発生にまつわる情報は多種多様であるが、それらの知識体系を構築している共通の要素に着目することで一般化することが可能である。本論では音または声の発生に関連する知識の総体をそれぞれ音発生のフレームと声発生のフレームと呼ぶことにする。

両フレームの中で、共通要素として抽出できる中核的なものは音源（音を立てる物体または声を発する生物）というものである。また、音を表す擬音語は意味的性質によって外部音と内部音に分けられ、外部音においては、音の発生法（音を立てる方法）もフレーム要素として重要である。

音と声の発生は動的事象である。そのため、発生前、発生時、発生後の3段階を想定してフレーム要素を捉えることができる。音発生のフレームにおいて、外部音（例えば、接触音や破損音）は使役事象に参加することが可能である。使役事象には、使役者、道具、働きかけ、音源、音の発生法などの要素が含まれる。そのうちの音源に関しては、音の発生とともに状態変化が起こる場合とそれが起こらない場合がある。それに対し、内部音（例えば、電子音）は音源から自発的に放出するものであり、使役事象に組み込まれにくい。声発生のフレームにおいて、声は生物の内部音として考えられる。ただし、声を放出する音源が人間である場合では感情を伴うことが多い。

両言語の擬音語は一般的に、1つの事象の音を表す単義語であることが多い。擬音語が異なる事象に参与する場合、複数の意味を持つものと見なすことができる（例えば、日本語の「ごろごろ」、中国語の *dida*）。擬音語が持つ意味を外部音、内部音、声によって分類すると、日本語の擬音語では外部音、中国語の擬音語では声を表す意味に偏るという傾向が見られる。

第5章 擬音語の意味的特定性：音源が持つ指定

擬音語の持つ情報は擬音語の使用を意味的に規定する。5章と6章では擬音語の意味的特定性（規定性）を中心とした議論を展開する。本論では、音源と音の発生法という2つのフレーム要素を取り上げ、それらが持つ指定を考察した。両言語が示す傾向的な差異として、日本語の擬音語は意味的特定性が中国語の場合より一般的に高いことが分かった。

音源が持つ指定に関して、有生性の有無を第一基準に音源を有生音源と無生音源に分けた。有生音源に対しては有生レベル（「うおー」）と特定レベル（「わんわん」）の2

つを設けた。後者の音源は特定性が前者より高い。一方、無生音源に対して、無生レベル（「ごーごー」）、性状レベル（「とんとん」）、特定レベル（「ころころ」）の3つを設けた。特定レベルの特定性が最も高く、無生レベルの特定性が最も低い。本論では両言語の擬音語の各意味が指示する音源の特定性を各レベルに分類した。その結果、有生音源において、日本語では特定性レベルに、中国語では有生レベルに偏るという傾向が見られた。無生音源においても、日本語では特定性レベルに、中国語では無生レベルと性状レベルに偏るという傾向が見られた。

無生音源に関して、音源の大小という相対関係による指定もある（「ころころ」「ごろごろ」）。日本語の擬音語において、無声と有声という音声素性は意味的に音源の大きさを規定することが多い。一方、中国語の擬音語では一部の例に限って、音源の大きさは母音の開口度に結びつくが、無気と有気という区別は音源の大きさを反映していない。音源の大きさを指定する意味として、日本語は中国語よりはるかに多いという傾向が見られる。

第6章 擬音語の意味的特定性：音の発生法が持つ指定

音が持つ音量や音質に関する情報は、物体が音を発生させる際の動きの強さや速さを反映しやすい。日本語の擬音語体系では、無声音は＜弱く＞、有声音は＜強く＞というイメージに結びつきやすい。このような違いは、意味的対立を持つミニマルペアをなす語（例えば、「かちゃん」「がちゃん」）にだけでなく、それをなさない語（例えば、「さやさや」）にも反映されている。中国語の擬音語体系においては、氣息の有無が強弱という対立に結びつくわけではないが、有気音と摩擦音は、＜速く＞という指定を持ちやすい（例えば、*pa*, *shua*）。強さと速さの2つの軸を中心に、音の発生法が持つ指定を考察した結果、日本語の擬音語では両極の対立（強弱）、中国語の擬音語では単極の対立（速い）による指定を持つ傾向が著しい。指定を持つ意味の数としては、日本語では多く中国語では少ないという傾向が示されている。

第7章 擬音語の意味拡張

擬音語の意味的特定性は、擬音語の意味拡張の起こりやすさに関連する。意味的特定性の高い擬音語は、意味の拡張が起こりやすい。なぜなら、特定された性質や特徴が意味拡張に利用されやすいからである。日本語の擬音語は一般的に意味的特定性が高いため、中国語の場合より意味拡張が生じやすい。

意味の拡張に関して、フレーム内で起こる場合とフレーム間で起こる場合に分けられ

る。それぞれの基底にあるのは、メトニミーとメタファーと呼ばれる比喻である。前者は、フレーム内の焦点の移転に伴って生じる意味の変化である。擬音語は基本的意味として表現されるとき、その焦点は音または声という要素に当てられている。そして、別の意味に変わる際には焦点の移転が起こる。移転時の焦点の行き先は主に音源、音源の状態、音源の心理状態、働きかけ・音の発生法の4つのタイプに分けられる。意味のフレーム間拡張は、音または声のフレームと拡張義が参加するフレームの間に何らかの対応関係が結ばれることによって起こるものである。

意味拡張における要素の利用されやすさという観点から見ると、日中各言語内では、外部音を表す意味は内部音を表す意味より拡張しやすい傾向にある。また、音源と音の発生法の特定性が高い意味は、それが低い意味より拡張しやすい傾向にある。そして、両言語では、日本語の擬音語は中国語の擬音語より意味拡張が起こりやすいという傾向を示している。

第8章 実験的調査：擬音語と現実音の結びつき

擬音語の意味的特定性は、擬音語の使用傾向にも関連する。本章では、特定の状況に対して擬音語がどのように創出されるのかに注目する実験的調査を行った。日中各言語母語話者に提供したのは聴覚的刺激（現実音）と視覚的刺激（写真）であり、後者には音源と音の発生法に関する情報が含まれている。刺激を受けた被験者が答えた擬音語を3つの考察を通じて分析した結果により、日本語では一般的に擬音語と現実音の結びつき（現実音が擬音語の使用を規定する度合い）が中国語より弱いという傾向が示されている。

1つ目の考察は、視聴覚的刺激の有無による使用傾向の違いである。日本語の擬音語の使用において、視覚的刺激がある場合、回答の集中度（回答が一致するときの最上位頻度）はそれがない場合より高かったため、擬音語と現実音の結びつきが弱いと見られた。一方、中国語の場合、聴覚的刺激も視覚的刺激も擬音語の集中度に影響する要因とはならなかった。そのため、状況依存性と使用慣習性の2つの側面から、擬音語と現実音の結びつきを考察した。

2つ目の考察は、状況依存性による使用傾向である。同一の現実音が2つの異なる状況に現れた場合、日本語母語話者は、現実音が同じでも状況が異なれば異なる擬音語を使用するという傾向にあり、一方、中国語母語話者は現実音が同じであれば状況が異なっても同じ擬音語を使用するという傾向にあった。使用において、日本語では擬音語と現実音の結びつきが弱く、中国語ではそれが強いという傾向が示されている。

3つ目の考察は、使用慣習性による使用傾向である。各言語の言語内比較を行うと、擬音語で表現しにくいと想定される設問は、表現しやすいと想定される設問より回答の集中度が低く、個人差の大きい臨時的擬音語の使用が多いという傾向が見られた。両言語間の比較を行うと、中国語では臨時的擬音語の使用が日本語より多い結果が分かった。中国語では擬音語の使用上、音を忠実に描写する傾向が日本語より著しいと見られる。この側面も、中国語の擬音語の使用傾向として、擬音語と現実音の結びつきが強いことを反映する。

本論では、百科事典的知識を重要視するフレーム意味論のアプローチを用い、擬音語の意味を中心とした包括的な考察を行った。本論の成果は、擬音語の意味論的研究に新しい知見を提供できる。

論文審査の結果の要旨

氏 名	游 韋倫
論 文 題 目	日中両言語における擬音語の意味と意味拡張 —フレーム意味論の観点からのアプローチ—
要 旨	
本論文は、アメリカの言語学者 Charles Fillmore が提唱したフレーム意味論の枠組みを用いて、日本語と中国語における擬音語の意味を比較したものである。擬音語の意味は「音」である、とされるが、その音の背景にある、発生源、発生原因に関する概念的知識が意味において重要な役割を果たしているとする。そのような概念的背景（フレーム）との結びつきを包括的に考察した結果から、日本語の擬音語と中国語の擬音語の背景的な指定度が異なることを指摘し、さらにそれが両言語における意味拡張の豊かさの違いや、擬音語選択の基準の違いと結びついていることを明らかにする。 以下、各章の内容を紹介しながら、論文を評価する。 第一章の序論に続いて、第二章の「研究背景」ではオノマトペについての先行諸説を紹介し、自らの立場を明らかにしている。擬音語に関して、著者は「特定の状況の音を描写する、有標の語」という定義を採用している。その有標性に関しては、日本語については議論をしているが、中国語に関して説明がはっきりしていない。 第三章では、この論文の理論的な枠組みとしてのフレーム意味論について解説される。やや羅列的な説明になっている感があるが、正しい理解がなされている。ただし、メタファーとメトニミーについて、概念領域ではなくフレームを用いている定義している点について説明が欲しいところである。 第四章では、擬音語のフレームが議論される。擬音語は、その音発生のフレームにおける違いから、幾つかの種類に分けられると主張されている。まず、声の発生のフレームと音の発生のフレームに分けられ、後者はさらに、内部使役音のフレームと外部使役音のフレーム、その後者はさらに、状態・位置変化を伴う場合とそうでない場合に分けている。例として、状態位置変化を伴う外部使役音のフレームは左のように表示されている。 擬音語の背景にある事象の構造をこのように具体的に指摘した論考は、この論文が初めてであり、極めて独創的であると言える。 第五章では、前章のフレーム構造に基づき、擬音語の持つ音源の指定について議論している。たとえば、「ワンワン」は音源が犬、「ゴロゴロ（転がる）」は音源が大きい固体という指定を持つ、と分析する。その上で、日本語と中国語の擬音語について音源指定の有無に差があると主張する。その検証のために、それぞれ一冊のオノマトペ辞典からリストしたすべての擬音語について分析を行ない、統計的に実証している。 第六章では、音発生事象が持つ様態的指定（＜強く＞＜速く＞など）について考察している。多くの擬音語は、音の発生原因事象における働きかけ行為の様態的指定や、状態変化・位置変化の動きの様態的指定を持つとし、日本語の擬音語では、語頭子音の有声無声の対立が＜強く＞＜弱く＞という指定と、また中	
主査記載 氏名・印	松本 曜

国語の擬音語では、有気音と摩擦音が＜速く＞という指定と結びついているとしている。その上で、両言語の擬音語における様態指定の有無を調べ、日本語の方が指定されているケースが多いとする。

第五章と第六章の内容に関連しては、直感的には正しいと思われるが、証明がしにくい現象について、統計的に実証的に示した点が評価できる。ただし、資料として用いている辞書をどうして選んだのかについては、根拠がはっきりしない。また、どうして中国語の擬音語に背景的な指定が少ないのかについて、中国語の他の語彙（たとえば動詞）における様態指定との関わりを議論するなど、その類型の特徴との関連を考察する必要があるだろう。

第七章では、意味拡張の問題を、意味の指定性と絡めて議論している。まず、意味の拡張に関しては、フレーム内で起こる場合とフレーム間で起こる場合に分け、それぞれの基底にあるのは、メトニミーとメタファーであるとする。前者は、フレーム内の焦点の移転に伴って生じる意味の拡張であり、焦点の移転先は音源、音源の状態、音源の心理状態、働きかけ・変化の4つに分けられるとする。意味のフレーム間拡張は、音のフレームと、拡張義が参加するフレームとの間に対応関係が結ばれて起こる。

ここで著者は、指定性仮説という仮説を提示する。それは、指定性が高い擬音語は意味拡張を起こしやすい、というもので、その仮説から来る予測を検証している。予測の一つは、日本語、中国語のそれぞれで、指定性が高い擬音語が意味拡張を起こしている率が高いこと、もう一つは、前章の結果を受けて、日本語の方が中国語よりも意味拡張の例が多いことである。いずれも、統計的に正しいことが示される。

この章の内容も独創的なものである。ただし、指定性の仮説がどうして成り立つのかに関して、メトニミーに関しては動機付けが理解できるが、メタファーに関しては動機付けがはっきりしない。実際、日本語においてメタファーに限って数値を見ると、指定性の仮説の予測は成立しておらず、この点に関しては指定性の仮説の適用範囲を再検討する必要がある。

第八章は、擬音語の選択における視覚的情報の役割に関して実験的に示したものである。日中語母語話者に聴覚的刺激（現実音）または視覚的刺激（写真）あるいはその両方を提示し、被験者がどのような擬音語で音を描写するかを調べた。その結果、日本語は一般的に視覚的情報が擬音語の使用を規定する度合いが中国語より強く、慣習性が高いという傾向が示された。実験で用いた刺激の選択に関して公平性があるのかどうかについて若干の疑問がある。また、被験者間の回答の集中度を指標として考察を進めていることに関して、集中度に貢献する他の要因を考察する必要があるだろう。

全体的に、独創的な議論が展開されている点が評価できる。また、直感的な議論ではなく、実証的な姿勢が貫かれている点も評価できる。上で指摘したような課題はあるものの、全体的にはすぐれた論考である点には間違いない。

以上に鑑みて、本委員会は全会一致で、論文提出者 游韋倫 が博士（文学）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	松本 曜	副 査	東京外国語大学 総合国際学研究院 教授	望月圭子
副 査	教授	岸本秀樹	副 査	准教授	田中真一
副 査	大阪大学 言語文化研究科 講師	秋田喜美			